

自由論題セッション報告申込用 要約フォーマット

氏名(Name)

井尻直彦

所属・職(Affiliation)

日本大学経済学部・教授

報告タイトル(Title)

日本・中国・韓国の近年の貿易構造の変化: RCA 指数, 産業内貿易指数, 顕示オフショアリング指標の計測

キーワード(5 keywords)

GVCs, RCA 指数, 産業内貿易指数, オフショアリング, 貿易構造

要約(Abstract)

1. 研究目的(Objective)

グローバル化のなかで成長してきた GVCs であるが近年の保護貿易主義の台頭によりオフショア先の変更を迫られている。この時期に日本・韓国・中国の貿易構造がどのように変化しているかを伝統的な貿易指標(RCA や IIT)や新しい指標(顕示オフショアリング指標)により明らかにし, その影響を既存の貿易理論から検討する。

2. リサーチ・クエスチョン(Research question)

近年の日本・中国・韓国の貿易構造の変化と財・産業の特性(財の代替弾力性)との関係を明らかにする。

3. 研究デザインと方法論(Research design/methodology)

最新の国連 Comtrade データを用いて, 2001 年から 2022 年まで日本・中国・韓国の RCA 指数, IIT 指数, 顕示オフショアリング指標を財の代替弾力性にもとづく産業特性・財特性を考慮して計測する。

4. 発見事項(Findings)

- ①日本は韓国・中国と異なる貿易の成長経路を示している(日本の貿易額は増加しているものの貿易取引数が減少している)。
- ②分析対象期間における貿易構造の変化の規模は, 韓国が最も大きい(経済厚生 of 改善が大きい)
- ③韓国は 2001 年以降, 全般的に産業内貿易度を高め, 日本の貿易構造に急速に類似してきている。
- ④比較優位, 垂直的産業内貿易(相対的に輸出単価が輸入単価よりも高い), 貿易変動が生じるのは, 製品差別化度が高い財に多い。

5. 理論的・経営管理上のインプリケーション(Theoretical/practical implications)

本研究は、間接的であるが、日本・中国・韓国の貿易パターンは、国際貿易理論が想定するパターン(技術格差・製品差別化が国際貿易の決定要因)と概ね一致しているというインプリケーションを示している。

6. 限界(limitations)

今回の報告は、計量経済学的モデルによる実証ではない。どのように推計モデルを組むかは今後の課題である。また、使用している国連 Comtrade データは、国際比較可能な最も詳細な財分類 HS6 桁)であるが、企業個票データではなく、あくまでも間接的にしか技術格差・製品差別化等を発生させる要素を計測できていない。

7. 独自性と価値(Originality/value)

貿易変動(新しい貿易・失われた貿易)や顕示オフショアリングという貿易データのみを使用する独自の指標を用いており、新しい分析結果を示している。